

日常診療で 内分泌疾患を 見逃さない!

内分泌疾患は適切な診断・治療により、治癒あるいは良好なコントロールが得られる症例が多い。一方で、治療が遅れるとホルモン過剰や欠乏による全身性の合併症により、時に非可逆性の障害が引き起こされる。そのため早期診断・早期発見が重要である。しかし多くは稀少疾患であるため、教科書で勉強した記憶はあっても症例経験が豊富な内科医は少ない。さらに教科書に記載されているような典型的な症候や検査所見を呈する症例ばかりではないことから、一般医家が日常診療で内分泌疾患を想起することは難しい。

内分泌疾患を疑う契機は電解質異常、生活習慣病の急な悪化、特徴的な身体所見などである。内分泌疾患を疑う、あるいは否定したい場合は、外来でのスクリーニング検査である程度その可能性を確認してから外部施設の専門医に紹介したいと考えるかもしれないが、スクリーニングに必要なホルモン検査項目の選択や結果の解釈に悩む場面が多いと考えられる。また、逆紹介された際の情報提供書に記載されている負荷試験の結果判定は難解で、その後のフォローに戸惑うことも予想される。

本特集では日常診療で一般内科医が内分泌疾患を疑うポイント、スクリーニングで施行すべき検査、内分泌検査結果の解釈、専門医への紹介のタイミングについて、エキスパートの内分泌医にわかりやすく解説していただいた。Editorial では本特集の内容を総括し、内分泌疾患を疑う端緒となる症候・一般検査値異常・合併症に分け、疑うべき疾患やスクリーニングに必要な内分泌検査項目をまとめた。第1章では日常的に遭遇頻度が高い内分泌代謝異常として血清 Na 値、血清 Ca 値異常、低血糖を取り上げた。これらの異常所見は一般検査で偶発的に発見されやすく、入院症例では他科から相談されることも多い。これらの非特異的な検査値異常から内分泌疾患を見逃さないコツや鑑別診断の手順をまとめていただいた。さらに、近年頻度が増えている免

疫チェックポイント阻害薬による全身の内分泌腺への影響や内分泌異常についても項目を設けて解説していただいた。第2章では代表的な内分泌疾患を網羅し、単なる教科書的な記載ではなく、非専門医が一般症候や検査値異常から疾患を「見逃さない」ポイントと診療の流れ、一般的な経過について実践的な内容を解説していただいた。第3章では日常診療で疑問に思う“Clinical Question”に対するエキスパートオピニオンとコンセンサスを執筆していただいた。

本特集を内分泌疾患診療の辞典として診察室に常備していただき、原因のわからない電解質異常、若年性の高血圧・糖尿病・脂質異常症・骨粗鬆症、生活習慣病の急激な悪化を呈する症例に遭遇した際には積極的に活用し、内分泌疾患の鑑別診断、除外診断を進めていただければ幸いである。

田辺 晶代 (国立国際医療研究センター病院糖尿病内分泌代謝科)